第411号 昭和54年9月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年3月31日 第三種郵便物認可

1979年（昭和54年）
9月号（No. 411）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

日本山岳会チョモランマ登山計画協議のための訪中報告（渡辺兵力）…（1）
山岳図書を語る夕べ……（1）
第16回「この一本展」より……（2）
映画「穂高讃歌」のこと（折井健一）…（4）
先人の影（関塚貞亨）…（4）
東西南北
スイス便り（富田健一）…（5）
第17回木暮理太郎翁碑前祭……（6）
図書紹介……（7）
お知らせ……（8）
ヤング・アルピニストの集い
——映画と講演——
ルーム小集会
——ヒマラヤ山麓の博物学
雪崩研究会
自然保護……（8）
図書受入報告……（10）
会務報告・ルーム日誌・会員移動…（9）
カット／松本慎太郎

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開設時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

日本山岳会チョモランマ登山計画（JQE・一九八〇）協議のための訪中報告

渡辺兵力

すでにご承知のように、エベレスト北面からの世界最初の登山許可がJACにおりたので、登山計画立案に必要な諸情報の収集と協力をして下さる中国登山協会の幹部との協議のため、去る七月二十九日～八月三日の間、渡辺（兵）、宮下両会員が、北京に出張いたしました。

二十九日夜北京に到着、民族飯館と称する大ホテルに宿泊。八月一日の夕方まで、宿舎から一歩も出ることなく、中国側の用意した全文二〇頁におよぶ、約定書（本文）、付属書・一～四の逐条審議をやりました。会談は、終始、山好き仲間の気分を土台としたものでしたが、何分にも、社会体制の全くちがう外国の山に、登らせてもらう、という大前提のある仕事で、いささか勝手がちがう問題や価値観に出会って、JAC代表として面くらうこともいくどか経験しました。

交渉の相手方（中国側の代表者）は有名な史占春氏（チョモランマ隊の隊長）でしたが、氏はいかにも朴訥とした、しかも仲々しっかりした人物で、こうした交渉相手として頼もしい人でした。訪中団（JAC、日山協、日中文交協会、読売新聞）の方は主として私が主役にならざるをえませんでしたが、どうにか、今秋の偵察隊と、来春の本隊を送りだすレールを確保して帰りました。

今回の試みには、ざっと考えても三つの「未知」があるように思えます。その第一は、もちろんエベレスト北側の自然、その第二は、中国という社会、その第三は、乗物で五千米のベース・キャンプ（有名なロンブク僧院）に着き、ただちに八千米への登行、です。JAC隊は、世界にさきがけて、この三つの未知の世界にたち向うことになります。たいへん嬉しいことと同時に、慎重かつ激しい闘志をもって全てのことにあたらねばならないと、帰路の機上で痛感いたしました。

8月理事会ではチョモランマ委員会（西堀会長、折井、渡辺、織内、望月、小原（勝）、田口、吉阪、村山、金坂、村木、大塚、丹部、中村、飯野各会員）とJQE委員会（渡辺、宮下、浜野、湯浅各会員）が承認され、JQE委員は必要に応じ増員されることとなった。

山岳図書を語る夕べ

フランスの山の本
——近藤等氏を迎えて——

図書委員会主催「山岳図書を語る夕べ」は、去る三月八日夜近藤等氏を講師に迎えて開かれました。フランス語圏の山の本について、日本のみならずフランスでも指折りの知識を持っておられる近藤氏は、永年のフランスの山の本とのつきあいやシャモニ名誉市民ならではのアルプスの山と人との裏話などをたのしく語り、みのり多い一夜でした。報告が遅くなりましたが当夜の話のなかからいくつかをご紹介します。

（記録・大森）

・モン・ブラン初登頂をめぐって

はじめてモン・ブランが登られたのは周知のとおり一七八六年。ジュネーヴの自然科学者ソーシュールが一七六〇年、はじめてシャモニへ旅行をしてモン・ブランの登路発見者に賞金を出すと発表したのがきっかけ。ソーシュール自身はルートが見つかれば自分が最初に登るつもりだったのが、バルマとパカールに初登頂の栄誉をさらわれて、翌一七八七年に第二登をなしとげた。四十七歳だった。パカールは、猟師バルマの夫人のお産にたちあったという縁をもつ医者だった。ソーシュールはその後十七年かかって、アルプスと山麓の登山と旅の記録をまとめた四

・お知らせ——集会委員会

第382回小集会　赤岩峠大ナゲシ（一五三二M）付近と御岳登山
日時　10月27日（土）～28日（日）
宿泊　大滝村中双里　仙峡亭
TEL 04945-6-0223
費用　四千円（交通費別）
集合　27日仙峡亭へ午後4時まで。
御岳登山希望者のみ三峰口駅前へ27日午前9時30分に集合
申込先　JAC事務局へ電話か葉書で、御岳登山希望の有無、住所、氏名、電話番号を。

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

巻の『アルプスの旅』を発表した。この初版本がジュネーヴの画廊にあるのを見つけて欲しかったが高価なので逡巡していた。ところが、ジュネーヴにあるとふと口をすべらせたために日本山岳会にあっさりと買われてしまい、惜しいことをした。以前イタリアのボローニアで二〇〇部複刻限定版が出ているし、つい最近も複刻版が出版された。本は読むものだから、高価な本だからと山岳会が金庫に入れておくのはもったいない。

・山の本との出会い

最初に読んだフランスの山の本はエミール・ジャヴェルの『一登山家の思い出』で、中学生のときだった。充分に内容を理解したとはいえないが、装幀のいい本だったことが記憶に残っている。ジャヴェルはマッターホルンの第15登をしていて、これは現在の基準でいえば北壁の第15登に相当するだろうが、ジャヴェルは記録や実践の面で歴史に残る人物とはいえない。しかしその豊かな文学性はまことに秀れたものがあり、ジャン・コストとともに中学生時代、最も影響を受けた。ジャン・コストの『アルピニストの心』の日本訳は、当時『岩・氷・ランプ』というタイトルだった。当時はわからなかったが、その後原文と照合してみたらあまりにひどい翻訳なのでびっくりした。

ジャヴェルと同じタイプともいえるのがギド・レイ。彼の山登りも記録としての価値は薄くてもジャヴェルと同様、山への対し方、考え方の点で高い価値をもっている。記録は時間がたち時代が変れば色あせることがあるが、ジャヴェルやレイのような思想は永遠に輝くだろうと思う。ジャヴェルの尾崎喜八氏の訳は非常な名訳だが、今度機会があって、近く私自身が新訳をする予定がある。

・翻訳こぼればなし

最初に訳したのは、クレール・エリアーヌ・アンジェルの『ヒマラヤへの挑戦』だった。山内義雄先生に訳稿をみてもらったが、丁寧に朱筆をいれてくれ、半分書き直しをさせられた。戦争中にその草稿を紛失してしまい残念に思っている。その後その本が翻訳出版されることになったが、時の担当編集者が高須茂氏で、「訳者の言葉」のあとがきをどんどん書きかえてしまい、自分の考えてもいない内容で活字になったのでおどろいた。当時は、編集者とか本というのはそういうものなのかと思っ

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

第十六回「この一本展」より

水彩画家　丸山晩霞

（昭和十七年　日本水彩画会）

大下藤次郎　（一八七〇年―一九一一年）
丸山　晩霞　（一八六七年―一九四二年）
吉田　博　（一八七六年―一九五〇年）

以上の三画伯は、別格の先人である高島北海を除けば、近代登山の先駆者と同時に歩み出した山岳画家の代表者、と言ってよいだろう。前二者は、早期本会々員でもあった。

大下は名著「水彩写生旅行」で、つとに尾瀬を絵によって紹介し、日本水彩画会の創立者としても早くから著名であったが、惜しくも四十一才で夭折された。吉田は洋画から出発されたが、山岳版画家として大をなした。その適格な描写力は海外迄喝采を受け、多くの傑作をのこした。

晩霞は三人のうち一番長命で、水彩画家として一生を貫ぬき、多数の作品を残した。

小島烏水は特に晩霞の作品を愛好し、且理解者でもあった。その不朽の名著「日本アルプス」四巻のうちにも原色版として二点載せられている。そのうち中尾からの「錫杖岳」の作品などは登山家でなければ画題としない山だけに、烏水の好みにあったものだと思う。

さて出品した本は晩霞の亡くなった直後、知友、子弟、親族の方々の故人の画業をたたえた追悼の文を主体とし、且多数の遺作を原色版、コロタイプ版として巻頭にかかげ、追悼記念の本としてまとめられている。従って五百部限定の非売品である。追悼文中武田久吉博士が、晩霞の欧州からのたびたびの便りを面白くアレンジして載せて、故人のひととなりを面白く画き出している。

最後に、吉田博ご本人が「青年時代の晩霞君」という一文をよせられているので左に抜粋させていただく。

「四十何年か前のことです。私は上州沼田から一里程這入った後閑に写生に出掛けた事があります。写生していると岩陰から写生道具を肩に小柄な青年がひょっこり現れ、私の描いて居る処にやって来て、声をかけられたのが、そもそもの晩霞君との初対面なのです。

話して見ると大変面白そうな人なので〝今日はまずこれから宿で大いに語り合おうではないか〟と言うことになり、共に旧知の間柄のような気分になり画談、雑談に時の過ぎるのを忘れて君の気焔を拝聴した。……。」（以下略）

「松阪の一夜」ならぬ若き二人の画人の「後閑の一夜」が近代山岳画の夜明けを早めたと言ってもよいと思うが如何なものだろうか。

石川治郎

山は屋上より　足立源一郎 著

（昭和三十一年朋文堂）

出遭いとは、私の経験では偶発的なものと信じている。昭和四十三年四月下旬、第二回上高地開山祭、それは今迄の山行のうちでも、忘れ得ぬ思い出。NHK・TV新日本紀行「松本平」の二場面に私が映像として出たことと、山岳画協会の足立真一郎先生と地元松本市の加藤水城先生、私の師、一水会委員木村辰彦先生と数時間を過したその時、春陽会の大御所足立源一郎先生に紹介された。第四回の四月二十七日河童橋下の河原で、手打そばに樽酒を酌み交わ

ていた。

翻訳というのは、誤訳があるから悪い訳だと一概にはいえないところがあって、誤訳があってもすばらしい訳というのもあれば、誤訳はないが悪訳だというのもあってむずかしい。

エルゾーグの『処女峰アンナプルナ』は、敗戦国で信用されていなかったのか、翻訳権をとるのに二年もかかった。予想外のベストセラーとなったが、目的の山を発見するまでの経緯や登頂後の遭難などが一般受けの原因だったのだろうか。両手が凍傷で使えないため口述し、弟のジェラールが筆記したものだが、弟のほうはシナリオライターだから、相当脚色してうまくまとめあげてあるようだ。登場人物から「こんなこと言ったおぼえはない」と直接きいたこともあるから。

・氷河からの便り

二十数年前、インド航空の旅客機がモン・ブランに激突墜落したことがあった。モンテルランの小説『喪の銀嶺』はそれをヒントにしたものだが、昨年の夏、ボソン氷河の下部からその飛行機に積まれていた郵便袋が流れ出てきた。当時のままで宛名も読みとれるので、フランス郵政当局はそれを全部配達したそうだ。

・現代の名著とは

山の小説はフランスでもあまりいいのがなく、山はよく知っているが作家としては見劣りするとか、作家としては一流だが山をよく知らないとか、なかなかうまくいかないものだ。フリゾン・ロッシュでも、山は描けているが人間描写で不足する面があるし、先のモンテルランはその逆だし……。現在のフランスでは、レビュファとジョルジュ・ソニエが山の二名文家といえる。ソニエは地味だが名文家だと思う。毎年シャモニへ行くが、フランスの若い友だちに会うと、今度こういう本を書いたから日本語版を出してくれないかと頼まれることが多い。しかし、最近のは文章もあまり上手ではないし、いい本がなくなったようだ。50年代、60年代にはいい山の本が出ていたが、今後はあまり期待できないように思う。

・翻訳のよろこび

日本語に訳してよかったと思うのはやはりレビュファの『星と嵐』だ。いまでは九カ国語に訳されているが、当時は日本語版が最初にして唯一の外国語訳だったそうで、レビュファは、日本語版をかかえて嬉しそうにシャモニの人たちにみせてまわっていたそうだ。こうして翻訳を通じてたくさんの著者と知合いになれ、友だちのできたことがいちばん大きなよろこびだ。しかし悲しい思い出もあって、筆まめでよく手紙をくれたコガン夫人はチョーオユーで亡くなったし、そうかと思うと、何度手

「この一本展」より

している一団、足立先生を中央に山岳画協会の面々、加藤水城氏、村井米子氏、足立真一郎氏の明るい笑い声、岳沢をバックに、シャッターを切った。その秋十一月、あるスポーツ新聞に二日間連続の私の記事がでました。それを春陽会の松本洋三氏（連日通っているコーヒー店の常連）が見て、私が足立先生著「山は屋上より」を私蔵しているのを知って、とに角その本を貸せと言うので、渡したところなんと鎌倉の足立先生宅へ松本夫妻が訪問「私の尊敬している宇津先生の記事です。先生とは上高地で何回か、お会いしているそうですから是非サインして下さい」と言って、強引に天下の大先生に揮毫して頂いたのが、この本です。そのとき「懐しい本を大事にしてくれている人がいるのは嬉しいネ」と言われたそうですから、強引でもなかったのでしょう。友とは良きものであり、また常時人とのふれあいを大事にしてきた私自身も、このときばかりは人生の幸とは、こんなものであるかと大袈裟に感じました。私の数ある署名入り蔵書の中で第三者が介在している本です。翌年その翌年と上高地に春が来ても、ニコニコ顔のあの元気な頃の姿を見ることもなく、先生は昭和四十八年三月三十一日、第七回開山祭を前に逝去された。足立源一郎先生あの頃は有難うございました。

宇津力雄

山谷放浪記

小島烏水 著
（昭和十八年）

——署名本について——

小島烏水さんの戦時中の著作「山谷放浪記」は、発行が昭和十八年五月、わが国の物資という物資が、あげて戦争遂行用に集中されていた時期のものである。登山や山岳研究のような閑事の出版物に対する用紙の使用など、極度に制限されていた時代を反映して、造本はいうまでもなく、紙質や印刷など人一倍凝り性の小島さんが、よく諒解したと思われるほどひどいものである。翌十九年に出された「山岳文学」となるともっとひどい。しかし、小島さんの著作の中では晩年のものであるから、見落すことのできないものであろうと思う。

昭和十八年の五月某日、小島さん差出しの郵便小包を受けとった。開けてみると「山谷放浪記」である。扉には小島さん自筆の署名と、ありがたいことに私の名宛で敬呈としたためてあった。毛筆で独特の枯淡な筆蹟である。本書のなかの若干のミスプリントは、小島さんと思われるペンでいちいち訂正されていた。

前後して、「近著を別送、御一瞥を得ば本懐」という内容のていねいな「はがき」をいただいている。これはペン書きであるけれども、礼儀正しくしたためられ、表には小島久太と書かれてあった。

著書などを知友に贈る場合、発行書店から事務的に送らせたり、またそのことを知らせる労をはぶいてしまう弊風が、ちかごろ眼につくことが多いように思う。親子ほどの年令差のある大先輩の小島さんが、私のような後進に対してまで、その人柄そのままに、折目正しくきちんとした姿勢をとられていることに、私はいたく感銘した。

屢々謦咳に接した大先輩の思い出とともに、小島さんの「はがき」をこの本にはさんで、大切に保存している所以である。

織内信彦

La Spedizione Italiana all'Evelesto 1973 Gido Monzino

——伊エベレスト登山報告——

Guido Monzino が指揮をとった伊エベレスト登山は数億円物量作戦といわれた。当時、ABCへの輪送にヘリコプターが初めて導入さ

紙を書いても、レビュファから口ぞえしてもらってもいまだに一度も返事をくれたことのないボナッティのような人もいるし……。

近いうちに白籏史朗氏のアルプス写真集のフランス語版がパリで出版されるし、五百沢智也氏のヒマラヤ・トレッキングもフランス語版が出ることになって、日本のものがフランスへ出てゆくようになったのもよろこばしいことだ。

〔出席者〕山崎安治（司会）島田巽、小林茂、神原忠夫、寺本昭一、大橋晋、滝川清、大森久雄、宇津力雄、中村小一郎、菅野弘章、山村正光、岡沢祐吉、北島光子、鈴木郭之、田村俊介、越田和男、近藤信行、金坂一郎、武田満子、出口當、池田智津子、星野美津子、山本良三、伊藤博夫、松家晋、広瀬健三、石川治郎、宮下啓三、織田沢美智子（順不同）

映画「穂高讃歌」のこと

折井健一

穂高連峰の峻険な岩肌は、我が国の近代登山の原点として、多くのアルピニストを育ててきたが、近年の登山ブーム時代を迎えて、多くの登山者の中には心ない登山者も少なくない。かけがえのないその自然が損われようとしているなかで、神憲明君（会員番号八〇〇三）は、「日本の屋根、北アルプスの素晴らしい自然をフィルムに再現することを第一目標にし、この映画によって一人でも多くの人が穂高岳の美を認識してくれれば幸だ」とし、穂高岳の四季を通じあらゆる角度から撮影し続けた記録映画である。自然保護を呼びかけた意図が充分に汲みとれる。

山好きの神君が今から七年前に穂高岳山荘にアルバイトとして入山したのは十九歳の夏であった。朝夕に眺める素晴らしい北アルプスの景観に益々心を引かれ、今田重太郎さん等の協力を得て、仕事の暇を見ては、穂高連峰をくまなく歩いてカメラを回わし続けた。ひたむきに穂高岳を愛する神君の情熱をここまでかきたてた穂高の自然とは何んであったろうか。一カット、一カットに七年という年月をかけ、忍耐と努力を惜しまず製作したこの一本の映画に、それが表現されていると思う。

上映時間三十二分にまとめられたこの映画「穂高讃歌」は本会自然保護委員会の特別推薦を受けたが、また文部省からも一般教養、記録映画として特選を受けた。

神君の配慮で入手してあるので、各支部や会員の利用に供します。

先人の影

関塚貞亨

錦繍の千丈沢をすぎて
西鎌尾根をのぼっているとき
小馬の蹄鉄にまがう鉄片をみつけた

「この一本展」より

れたが、墜落したため新らたに調達されたというニュースもあった。パタゴニアから、70・71年に北極点行を企てた、伊探検隊の〝ドン〟Monzino という男はどんな男かという興味も手伝って、この豪華版を手にした次第。隊員65人。うち軍隊が45人、民間11人。シェルパも81人がリストアップされており、ヘリ2機、物資は一〇〇トンにおよんだ。

国防相の Mario Tanassi の挨拶もあり、登山過程はローマの作戦本部 Antonino Anzá 大佐とのテレックス交信のかたちで展開されており、その行動は概要に留っている。また高度順化の科学的報告もあるが、初歩的段階である。

片山全平

屋上登攀者

藤木九三 著

（昭和四年黒百合社）

――歌および署名入――

その頃出た山の本の中で、私が最も感銘を受けた本である。詩や浪漫が充満していて、がつがつ登るばかりが山でないことを教えられた。良書を貸すことの好きな私は、かなり多くの人にこの本を読ませたので、カバーを失い本を傷めたことを少し後悔している。

出品した本書の巻頭にある著者の画像の傍に記された、

われ男の子　山にしあるを幸なれと
ひたに慕いし日をなつかしむ

一九五六年マナスル登頂祝賀の日

藤木九三

の文字は、私からお願いしたものである。「屋上登攀者」をお持ちの方は幾人か居られるし、歌の記されたものもあるだろう。しかしマナスル登頂祝賀の日の署名は、この一冊だけに違いない。

川崎精雄

不二一周

国府犀東文・平福百穂画

（明治四十年隆文館）

犀東、百穂両氏の富士登山記で、記事に配するに彩色木版画を始め四十数葉の三色版、石版、ゼラチン版、写真版があり、興味深い画文集である。巻末に犀東氏の相模「栢山詣での記」を付録として添える。

富士山を物した書物十数冊の蔵書中まことに楽しい一冊として取り出しました。

明治四十年八月二十五日発行、定価の箇所に色版の印あるのはどうしたことか？　十数年前当地金沢の古書店正文堂書店で入手。

亀田与三次

世界写真図説

志賀重昂 著

（明治四十四年　地理調査会）

日本山岳会名誉会員、「日本風景論」の著者矧川志賀重昂（一八六三～一九二七）は、国家の大計を人口政策、石油政策、海洋開拓の三点におき、これを地理学的な見地からその必要性を論じた、明治の大地理学者である。

彼はまた「智識の普及こそ国の元気を養成する大原因」であり、地理学の考究は実に百般学問中の最も緊要なもの」として、地理研究の国家的重要性も唱えているが、「本邦ノ情態ヲ察スルニ、地理ノ攻究及調査ノ風尚未ダ熱熾ナラズ」と自ら地理調査会を組織し、自著の売上金を調査研究費に投じている。その対象となった本が「世界山水図説」（明治四十四年九月十五日初版）、「続世界山水図説」（大正五年八月十五日初版）、そしてこの「世界写真図説」である。本書は当初雪、月、花の三篇に分けて上梓と予告されているが、巷間雪篇のみ見受けられるのは如何なる理由であろうか。後に志賀重昂全集刊行の際、別にこの本の補訂版（菊倍版天金写真三〇〇葉説明一〇〇頁典雅極上製本、定価七円）を刊行する予定であったが、これまた

幸先よしとみあげる碧空に
槍の穂が突きあがる

前穂の東壁がみえる草原で
ザックをあけたとき
カメラの陰に錆びた蹄鉄がのぞいた
よくみると古いスキー靴の踵がねなんだ

五十年も前　ヒッコリーのスキーで
西鎌尾根を下った先輩の顔

穂高に湧く雲に　冬の槍がだぶった
アクシデントにゆがむ若い岳人の影

釘穴がコーヒー色につぶれた黒い鉄片
掌につつむと
つかの間の晴間に　光る滝谷が
槍の穂先から吹きだす雲が
独標のクロアールに舞う雪煙が
うかぶ
その人は　いま何処に

東西南北

スイス便り

富田健一

シャモニー三泊のうち一日が不順だったほか、その後のツェルマット、グリンデルヴァルト、ミューレンの10日間の山歩きは連日快晴にめぐまれ、すべての予定行動を大満足のうちに終え、今日ルツェルン湖畔の宿に着きました。

氷河を渡りながら、氷河の割れる響きを聞けたのは夢のようでした。ヨーロッパアルプスの素晴らしさは古くから伝えられていますが、それらを目のあたりにし、触れることのできたことは、今後いつまでも心に残ることでしょう。それに山麓の各根拠地が――随分観光地化され賑っていますがそれでもなお――我国の現状と比べ、余りに清潔すぎ、つくづく羨しく思いました。

藤島さんや別宮さんが目を輝かせ乍ら、よくスイスの山やチロルの話をして下さったことをずっと思い出していました。また槙さんや松方さん浦松さんなど大先輩が、今のグリンデルワルトやツェルマットよりはるかに静かであったろう山麓で、どんなに楽しい日をすごされただろうことかと想うのでした。

グリンデルワルトで案内してくれたガイド、カウフマンさんは、槙さんのお話をすると色々と当時のことを思い出し、ミッテルレギ小屋への協力を、今も山に登る連中は感謝していること、当時のガ

「この一本展」より

実行されず、全集第八巻（昭和四年三月二十日初版）に付録として抜すいが掲げられている。

さて、この本に収められている写真のうち山岳はロッキー、ユングフラウ、ヴェッターホルン、富士山、伯耆大山、羊蹄山、岩木山等であるが、世界最高点としてガウリサンカール（エベレストの誤称）が掲載されているのは珍しい。「我が薩摩の大島よりも南にあり、此の如き南方にありて猶ほ且つ頂上は四時雪を以て蔽はる。以て其の高きことを察すべし」と地理学者らしい説明をしている。なお、本書には著者の毛筆にて「半生著述何辺獲多在風袗雨笠間」の識語と署名がある。

神原忠夫

ASCENT TO THE SUMMIT OF MONT BLANC IN 1834

MARTIN BARRY

(Edinburg & London, 1836)

――一八三四年のモンブラン登頂記――

この春、丸善の欧米古書・稀覯書展に、例のアルバート・スミスはじめ初期のモンブラン登頂記が数種出ていた。そのなかの一冊に見覚えがあるので、帰って書棚を探したら、案の定出てきたのが「この一本」。

この著者より七年前に登ったジョン・アウルジョーの本は有名だが、こちらも第二十登以内には入る早期のものなのに、あまり注目されずに来た。著者はエディンバラ王立医学協会会長の肩書を持つだけに、高所における酸素不足の問題に関心を示しているし、ソシュールはじめ先蹤者の業績も頭に入れて登っているので、久しぶりに取りだして見て、改めて敬意を表したというわけ。二葉の石版画と巻末のパノラマも悪くない。

島田巽

Zigzagging among Dolomites 1873

E.F. Tuckett

この書の由来については昨年の「この一本展」の解説で記したから重複は避けるがタケット（Francis Fox Tuckett）の妹の著した絵図集、三冊の中の一冊である。（昨年、披露したものは "A Voyage en Zigzag" 参考迄）登山記の方は兄、タケットの著書 "Pioneer in the High Alps" を読み、随所に出てくる脚注、「Zigzagging の何頁参照」を併読すると一段興味が湧いてくる。例えば兄、タケットがドロミテ山中の一峰、アンテラオ近くの山で（Antelao）で「足を痛めて休息した…」と言う記事があるが、これを脚注の指示によって妹の絵図の方を見ると "F(兄) and E(妹) have a good day on the Antelao" と添書がついて、木製の安楽椅子に、兄タケットがパイプを口にくつろいでいる姿が描かれている。その姿が妹の巧妙なる筆致によって実に実感を伴った絵図である。

右はほんの一例であるが、とにかく、嬉しい本だ……。

成瀬岩雄

Peaks, Passes, and Glaciers――A Series of Excursions by Members of the Alpine Club

Edited by John Ball

President of the Alpine Club

英国山岳会の年報、アルパイン・ジャーナルの前身 Peaks, Passes & Glaciers は三冊になって出版され、何れも初期の会員、Alfred Wills, Mathews, Hinchliff, John Ball 其他の諸氏によって執筆されて、多数の愛読者を喜ばせたのであるが、屡々、会員諸氏は勿論、会員外の山岳愛好者等多数の人々の希望により、特に高所登山の折などにナップサックやポケットに入れて持って歩ける小型版のものを要求する者が多

イドもブラヴァント氏を残してもう皆亡くなったと沈んだ顔で話していました。

第十七回木暮翁碑前祭 記念感話　二題

例年、木暮碑前祭では幾人かの方々から記念感話をいただいております。本年は多士済々で、山崎金次郎、野口末延、島田巽、交野武一、浜野正男の各氏他、数人の方々にいただきましたが、そのうち、仙台の柴崎徹氏、宇都宮の渡辺宏之氏の談話をテープからおこしてみました。

（文責　山村正光）

＊

柴崎徹氏　宮城支部の柴崎です。木暮先生は明治二十六年から三十二年まで仙台にいらっしゃいました。最近になりまして、東北大学の古い方々が、色々の文章の中で木暮先生のことをかいておられます。

今、私がだいております写真は、私の岳父高橋憲二でございますが、実は、本年三月二十日泉ヶ岳に八ミリをとりにいっておりましてなくなったわけなんです。

何か、三年程前、こちらにうかがったときに、岳父が、木暮先生の仙台における唯一のものといっていい程の、蔵王の清渓小屋に木暮先生のお書きになった額が残っているとか、そんな話をしたらしく、今度行くときにはその写真を持って行きたいと、さかんに言っていたわけです。

これをまとめようとしていた直後に事故をおこしてしまい果せませんでした。私も色々のことがありましたが、これだけは果そうと思い、ようやく間に合いまして、「木暮理太郎翁の清渓小屋の掲額」という小冊子ですが、皆様に見ていただこうと思いまして持って参りました。

私共の大先輩である、沼井鉄太郎氏は、――偉大なる日本の山の父　木暮理太郎氏を先輩に持つ杜市岳人は光栄なるかな　そしてその人の真筆を掲額に保つ清渓小屋は幸いなるかな――とおっしゃっております。木暮先生をしのび、この一本を碑前に捧げ、御挨拶にかえさせていただきます。

渡辺宏之氏　ただ今御紹介をいただきました渡辺宏之でございます。私たちの慶応山岳部の三井教室の先鋭分子、金山淳二さんとか、河野幾雄さんなどから、今年手紙が来まして、この碑をつくるについて相談がございました。それで、早速三井親分のことですから、ハイかしこまりましたと、そのようにを致しました。

そして、三井さんが、いよいよできあがったからやってこいというので、今日一緒にまいりました。うちの城山山岳会の高山伝治君と木暮祭に参加させていただきました。丁度秋の頃でございまして、もみじが非常にきれいでした。このような白樺の林などは全然覚えておりませんで、とにかく三井さんが昔の山登りの姿そのままで、トラックなどうごかしたり、走り回っておりましたので、すこしでもお手伝いしたいと思いましたが、何しろこっちも様子がわからず、ただ三井さんの働く姿をみておったわけでございます。

それからずっと御無沙汰しておりましたが、自分の商売のこと、従ってそれ迄の菊版大のものを四・六版より、やや小型のものにして出版されたものが、ここに披露するものである。『内容は勿論菊判のものと変らないものであるが、唯絵図だけは除き、地図だけは元版と同様のものを出版した』と巻頭に記してある。本書は一八六〇年、第五版とあるから相当に売れ行きのあったものと想像される。菊版大のものは表紙も厚く、確かに山歩きに持ち歩くには不便であり、山歩きに携行するにはこの位の小型のものが要求されるのも無理ない事である。それにしても決して軽いとは言えないが、一面他に適当な案内記もなく、天幕や岩小屋などで停滞する時に読んで楽しむものとして特に喜ばれたものの様だ。我々もその昔、田部重治さんの「日本アルプスと秩父巡礼」等をリュックのポケットに入れて楽しんだ事を思い出し、ここに本書を披露する次第である。

成瀬岩雄

わたしの山旅

槙　有恒　著

（昭和四十三年　岩波書店）

――特装本――

この本そのものについては、すでによく知られているから、別に「この一本展」へわざわざ持参するほど珍しいものではない。

しかし、この本の特装本があることを御存知ない方はいると思う。今年は出品が少いというので、にぎやかしに並べたゆえんである。

岩波新書としていまからちょうど十年前に出版されたとき、槙さんのご本なので特装本を作ろうということになり、小方全弘氏と小生が音頭とりになって、佐藤久一朗氏にお願いしてこしらえたものである。

三十五部作り、費用総計は三万六千五百六十三円、一冊当り約千二百円で、いまからみると大変安く出来た。ただ藤島敏男さんは、版から作りなおさなければ、といわれ、断わられたことを憶えている。

山崎安治

特別出品

Voyages dans les Alpes 1～4

Par Horace-Bénedict De Saussure (1779～1796)

この本についての詳しい説明は、会報四〇一号の図書室ニュースと、本号「フランスの山の本」の記事にある、近藤等氏のお話しを参考にして下さい。

とをいうも変ですが、この大谷石は第三紀層の凝灰岩でありまして、火には非常に強い石で、英語でグリーンタフといいます。しかし、海抜千メートルから千五百メートルの自然環境の中で、どのように変化するか、私も不安でたまりませんでした。ただ三井先輩命令ですから、駄目だとはいえませんので、本音をいいますと、私としては一つのテストとしまして、ここへ建ててもらったような次第です。

この碑と前後して建てました。日光の戦場ヶ原から太郎山へ行く山王峠のわかれ道に、日光の山の精通者でありました矢島一郎さんの句碑がございます。そこに、私たちは一つの台座を大谷石でつくりました。高さ千三百八十メートルくらいの位置ですが、たまたま三週間程前、渡辺公平さんをお連れして来たばかりでございます。渡辺公平さんは急逝されましたが、大谷石は無事で、このように皆様からかわいがっていただいておりますし、木暮先生のお顔もきず一つなく健在であるのを拝見して、私自身ありがたいことだなあと、つくづく思っております。

そして、私、余計なことを申し上げるようですが、一度山登りといいますか、山岳界と縁を切ってる男でして、それが再び皆さまにお眼にかかれるようになったのは、実に三井松男さんのおかげで、そのきっかけがこの碑でございまして、その意味からおきましても、木暮先生を始め、三井松男さんは私の恩人のような気がしてなりません。

どうか、この碑が何時までも何時までも、皆様に愛される碑でありますよう、私、心からお祈りしております。

なお、このレリーフを制作されました。佐藤久一朗さんは我々の大先輩であります。何時かは、この碑前で是非御一緒させていただきたいものと願っております。

速報

8月14日事務所開設（新宿区市谷砂土原町二ノ五 読売市谷ビル2階 TEL 269-4453～4）

9月15日偵察隊（隊長＝斉藤惇生 高見和成 長谷川良典 尾崎隆 磯野剛太 横山宏太郎 岡島成行 北川敏孝 中村進）出発

JQE委員会

図書紹介

世界山岳地図集成

『カラコルム・ヒンズークシュ編』

地図帳というものはたいへん便利なものである。自分は仕事柄、この種のものに毎日、お世話になっているから、とくにそう思うのかも知れない。だが、ときには用途を忘れて、目ざす地名が出ていないと、悪態をつくこともある。

ところが、今度はそういうものを自分が作る立場になった。本地図集成の『ヒマラヤ編』で、一昨年のことである。ネパールの一部分であったけれど、作図と解説に約半年、文字通り、四苦八苦した。しかし、完成したものを見ると、校正漏れなどが気になって、気が滅入るのである。

さて、第二集ともいうべき『カラコルム・ヒンズークシュ編』は、まったく高みの見物をさせてもらったわけだが、さすがは人を得て、というのが執筆陣を見ての私の第一印象であった。同時にまた、われわれが手探りでやった第一集が、たとえ、順序が逆だったとしても、こうはいかなかったのではという気がしてならない。

作図者の宮森常雄、高木泰夫の両氏は、ここにいうまでもなく、カラコルムとヒンズークシュ研究の第一人者であり、また、天山とパミールの田村俊介氏は岳界切ってのソ連通である。したがって、いずれの図幅も各氏の研究の集大成といってよかろう。私は安心してこれらを利用させてもらうつもりである。

ただ、印刷段階での問題だが、各図幅の着色、陰影部が少し暗くはないか。好みの問題もあるし、ここは乾燥地域ということもあり、むずかしいところだけれど、茶色と水色にもっと明るさがあれば、と私は思う。もちろん、色彩が精度を左右するわけではないが、見た目に美しいということは、やはり、大事なことであろう。

次に、全体を拝見していて、やった！ と膝を打ったことが二つある。一つは、歴史的な地図をいくつか転載してあること、もう一つはこの地域の偉大なパイオニアの評伝があることである。ヒマラヤ地域でもシュラーギントワイト兄弟、J・D・フーカー、T・ロングスタッフ、ティルマンなど、多士済々だし、地図もいろいろある。ヒマラヤ編では、そこまで考えが及びもつかなかった。

そして解説文は、多彩な執筆陣がそれぞれ個性的に筆を運び、読み物としてもたいへん楽しい。しかし、文末の参考文献の扱い方が不統一で、一考を要するようだ。これはヒマラヤ編でもいえることだし、企画の段階で統一しておくべきだったと思う。学術論文ではないといえば、それまでだが、このシリーズは画期的なものだし、やがては登山の文化史上に残るものと思うから、なおさらである。

少なくとも、単行本の場合には「著者・書名・発行地・発行所・発行年」、雑誌は「著者・題名・雑誌名・巻数（号数）・年代・ページ」を明示したいものだ。もっともらしく文献を掲げていても、一冊の本をメイン・タイトルとサブ・タイトルで二冊の本のようにしたり、著者と編集者の区別ができずに、同じ書名の本が別々に二冊存在していると、ご本人は実物を見ていないことはもとより、本文さえも信用しがたくなる。これは私だけの悪い癖かも知れないが……。

さて、この春、私がネパールに行ったとき、ヒマラヤ編の中の関係個所の、著者用抜き刷りを持っていった。たった二枚の地図だったが、予想した通り、トレッキングではたいへん重宝した。同じ方面にキャラバン中のさる日本の登山隊は、同じ地図を電子複写して持ち歩いていた。著者としては嬉しいやら悲しいやら……。また、外国人トレッカーに自分のものを見せたら、非常に感心し、ぜひ入手したいという。国外ではイギリスやイタリアの山岳図書店で販売しているからと、その店を紹介しておいたが、トレッカー氏いわく、自分たちは日本語の解説が読めないから、地図だけでいいという。地図だけなら、値段も安くなる！

もっともである。そこで、学研は初版を売り切った段階で、本当の地図集を考えてもらいたい。紙を薄くし、できれば一枚一枚がバラバラになるようにする。帙入りでもよい。実用を第一にするのである。地図は気軽に野外へ持ち出せてこそ、地図の意味があろうというもの。ネパールを歩きながら、つくづくそう思った。

三五〇頁、うち地図二八図、カラー写真三二頁、学習研究社、昭和五十三年十二月十日発行、定価二一〇〇〇円（薬師義美）

●お知らせ

・ヤング　アルピニストの集い

学生部海外登山研究会では、大学山岳部や若い岳人のための、映画と講演の集いを開催します。

◇日時　10月19日(金)午後五時半～九時。
◇会場　全国労音会館(水道橋)
◇内容　映画「日本大学北極点遠征隊」第27回山岳探検国際フェスティバル銅賞。「早稲田大学ローツェ・シャール遠征隊」講演　浜野吉生氏（早大助教授）
◇会費　学生五〇〇円　一般七〇〇円
◇申し込み　山岳会事務所または、都内登山用具店へ。

・第三八三回ルーム小集会

――ヒマラヤ山麓の博物学――

場所　ルーム
日時　11月14日（水）18時30分より
講師　堀　勝彦氏
会費　五〇〇円

ヒマラヤの蝶や自然風物に豊かな知識をお持ちの堀勝彦氏をお招きして、ヒマラヤ山麓の博物学について、スライドをまじえながら、お話しをうかがいます。親睦会の用意もいたしますので、お誘い合せのうえ、是非御参加下さい。

・雪崩研究会の開催

学生部指導委員会
遭難対策委員会

日時（予定）　昭和54年12月1日（土）　17時―20時
場所　岸記念会館内　日本体育協会会議室
内容1　映画　アメリカの人工なだれ（16ミリ、カラー）解説　若林隆三氏
2　研究発表　左記の設問に対して学生部が研究発表し、参加者の質問を受け、講師が助言する。

設問1　厳冬期の新雪の雪崩の危険度と気温との関係について述べよ。
2　南アルプスの高所で、降雪後1週間の快晴に恵まれた。気温は例年よりも低い。雪は風でしっかりと締まっている。雪洞を掘りたいと考えるが如何であろうか。
3　晩秋の富士山吉田口に氷雪技術の訓練に入った。前日5合目で10センチほど新雪が積もったが、上部の新雪も少なく、大沢7合目でやっと靴がもぐる程度であった。大沢を登って頂上に達するルートの危険は如何であろうか。
4　冬の横尾谷をベースにして穂高で登山をしている隊がある。本日の天候よく、また翌日も快晴が期待できる。しかし台湾付近に低気圧が発生したことが明らかになった。翌日の行動を計画する場合に注意すべき点を述べよ。
5　冬山計画を立てるのに、悪天候による停滞を見込んで予備日数を設けることは常識になっている。雪崩の予防のためにも予備日数を忘れてはならないが、具体的な登山計画を仮定して、その場合の予備日数を、天候予想と雪崩地形とを考えながら計算せよ。

講師　金坂一郎氏
参加人員　一〇〇名（室の都合で人員オーバーの場合は締切）
参加費　三〇〇円（印刷費・通信費）
申込締切　10月31日（水）
申込先　日本山岳会学生部指導委員会担当理事　菅沢豊蔵　宛

自然保護

白川又林道建設の中止と大台ヶ原マイカー規制を求めて

―自然保護委員会の奈良県庁交渉―

大峰・大台ヶ原の自然保護の問題は、昭和51年8月以来当委員会で積極的に取上げ、翌年6月には現地視察、同年9月と昭和53年6月には奈良県当局に要望書を提出しアピールを続けて来たが、尚誠意ある回答が得られないので、本年5月25日(金)奈良県奥田良三知事宛の西堀会長名の要望書を携えて、奈良県庁にアピールに出かけた。参加者は折井健一副会長、鈴木郭之理事の他、沢井政信、池田智津子、渡辺正臣、中村純二各委員、オブザーバーとして岩崎三郎、中村あや、関西支部の田村聡明、村井葵、入谷浩右、安土武夫各会員ならびに大台・大峰の自然を守る会々長である西田智雄教授（奈良教育大）の計13名であった。これに対し奈良県側は今田道彦農林部長、井上圭三企画部長、久米広久林道課長、和田元二観光課長他林道、観光課係員計10名であった。

要望書は①白川又川林道延長工事の中止②林道工事により現実に自然が破壊されていることを認め、排土の処理その他の工法を再検討すること③崩壊等の危険に対する防災措置④白川又川流域の特別保護地区への昇格⑤大台ヶ原入山者に対するマイカー規制の5項目から成っていた。これに対し県側は、過疎地域での林業振興と森

美しい滝のかかる十郎谷は，林道を境とし，土砂によって完全に埋めつくされその姿を消した。（写真撮影・岩崎三郎会員）

林資源確保のため林道建設は必要としながらも①については残り8粁の車道を上部の水晶谷に向って延長する代りに、高度を上げず対岸に向って路線を変更した上、最後の4粁は幅2米の作業道とする。②排土の集中処理を行うと共にのり面の緑化を実施する。③危険な10ヶ所の中、9ヶ所の修復は既に完了し、残り1ヶ所も55年度に補修する。④は林相保護の見地で臨む。⑤は将来検討することもある、と説明した。

このように両者の間には自然の破壊防止と産業振興、あるいは大台ヶ原を自然の山域とみるか、奈良公園的とみなすか等、考え方の相違がみられ、問題の大半は平行線のまま残されることになった。しかし今後の開発計画について、天然林の伐採や植栽は、これまでの標高千百米以下を改め千米以下の約四百ヘクタールに限るとの方針が示されたことは、大きい前進であったと考えられる。またこの交渉の模様はNHKはじめ朝日、毎日、読売他各種報道機関を通じ、地元で大きく扱われ、世論喚起の上に有効な役割を果したことも確かである。自然保護委員会ではこれらの事情に鑑み、大峰・大台の問題はこれで一応の区切りとし、当分は地元での交渉に将来をゆだねることになった。

山岳第七十三年6Pに示されているように、前委員長の渡辺公平氏はこの問題に並々ならぬ熱意を燃やされ、今回も五月上旬の委員会では、自ら交渉団長として奈良県庁に出かける予定で居られた。ところが五月十一日、突然心不全により急逝された。これには私共も愕然とし、すっかり落胆してしまったが、茲に経過報告を行うと共に、同氏に対し衷心より哀悼の意を表する次第である。

なお、奈良県奥田良三知事宛に上記の通り会談の確認事項を文書にして提出した。（中村純二）

昭和54・6・4日

奈良県
知事
奥田良三殿

日本山岳会
会長
西堀栄三郎

時下、益々御健勝の由と存じます。

さて、去る5月25日、午前10時半より大台ケ原・大峰の自然保護に関する当山岳会自然保護委員会委員との会談に、お多忙にも拘らず、貴県庁の担当の方々が多数御出席下され、厚く御礼申し上げます。お蔭様にて、貴側の御意見を心ゆくまで拝聴することができ、亦、日本自然保護協会の理事でもある貴殿の県行政の御方針が自然保護を尊重されたものであることを再認識致し、誠に喜ばしく存じております。

就に、再度御礼を申し上げますと共に、会談の合意点を確認事項として附記致したいと存じます。

記

1. 白川又川流域の森林施業は、約海抜1000米を境界とするも、当面は、現在の林道の延伸目標点である大梅山附近の約海抜800米をもって暫定的境界とする。
2. 白川又川谷林道補修に関し、補修費用の増大をうながすとはいえ、排土の処理に対し充分な対策を立て、十部谷や大無瀬谷に見られるような自然破壊は絶対に防止されたい。
3. 白川又川本谷発電所取水堰堤上部に見られるような、過去二回も山崩れのあった危険な場所の修復には充分留意し、万全の防災対策を立てる。
4. 原生的山岳国定公園としての大台ケ原山頂の過剰利用による海域破壊防止の対策の一環として、マイ・カー規制を今后の検討材料として考慮する

会務報告

7月理事会
（7月16日午後6時30分　本会ルーム）

▽**出席者**　西堀会長、折井、渡辺副会長、宮下、中島、中川、鈴木、高橋、川上、大森、中村、小倉、越田、山口、菅沢、岡沢、嵯峨野各理事、小原（勝）監事、山崎、金坂、小原（晴）、大塚、太田、織内、近藤、田口、河野各評議員

委任　飯野理事、片岡監事、佐藤、望月、村木、木下各評議員

▽**議案**

◎日中交流登山について（宮下）

中国側からのチョモランマ（エベレスト）登山許可申請を提出していたが、7月5日、在日中国大使館から本会、日本山岳協会、日中文化交流協会の三者併記の許可文書が手渡された。具体的な登山に関する打合せを行なうため、7月中に代表を派遣されたいとの要請があるので、本会より渡辺兵力副会長ほか1名を派遣する　承認

◎UIAA総会への会員派遣の件（鈴木）

10月米国で開かれるUIAA総会に丹部節雄、植村直己両会員を派遣する　承認

▽**報告事項**

◎自然破壊実態調査の実施（鈴木）

自然保護委員会で、山岳地域の自然破壊の現況に関する基礎的な資料作成を行なうため、本会各支部に調査を依頼する。

7月臨時理事会
（7月24日午後6時30分　本会ルーム）

▽**出席者**　折井、渡辺副会長、宮下、鈴木、高橋、川上、中村、越田、山口、菅沢、岡沢、嵯峨野各理事、片岡監事、山崎、大塚、村木各評議員

委任　西堀会長、小倉、高木各理事、小原（勝）監事、金坂、小原（晴）各評議員

▽**議案**

◎日本チョモランマ登山隊について（宮下）

①チョモランマ登山許可文書を受取った三団体で再々協議の結果、訪中出発前に後援団体を決めた方が良いとの統一判断により、読売新聞グループに決定した。

②本会より渡辺兵力副会長、宮下秀樹理事を中国に派遣する。

③「日本山岳会チョモランマ峰登山隊―一九八〇」、略称「JQE」を正式登山隊名にする。　承認

◎日本山岳会学生部ティリッチミール山群縦走隊（一九八〇年）の派遣について（菅沢、嵯峨野）　承認

▽**報告事項**

◎婦人懇談会では一九八〇年にガルワール・ヒマラヤのケダルナート（六九四〇メートル）登山を計画中である。（山口）

ルーム日誌（54年7月）

3日（火）遭難対策委員会
4日（水）山研委員会
5日（木）海外連絡委員会
6日（金）山日記編集委員会
写真交換会
10日（火）自然保護委員会
16日（月）図書整理
18日（水）三水会
19日（木）学生部遠征委員会
21日（土）学生部壮行会
24日（火）臨時理事会
26日（木）図書委員会
28日（土）青年懇談会

今月の来室者　四三一名

会員移動（7月）

物故
一五〇〇　大野俊夫（7・3）

改姓
六六三二　渡辺光子→室光子へ

支部変更
八四一三三　梅沢　守（東海へ）
七六一八　千石信夫（宮城へ）
八二八六　角田啓蔵（信濃へ）
七七一〇　名和　顕（熊本へ）

図書受入報告

図書委員会

町田立穂氏寄贈図書目録（洋書の部）

1. Blakeney, E.H., "Peaks, Passes & Glaciers" J.M. Dent, 1926
2. Bonney, T.B., "Volucanoes", 3rd. ed. G.P. Putmam
3. Bozman, E.F., "Mountain Essays by Famous Climbers" E.P. Dutton, 1924
4. Burlingham, F., "How to Become an Alpinist" T.W. Laurie
5. Carr, C.F., "The Complete Hiker and Camper" Sir I. Pitman, 1931
6. Gos, F., "Zermatt and Its Valley" Cassel, 1926
7. Hoek, H., "Schnee, Sonne und Ski", 2. Aufl. F.A. Brockhaus, 1927
8. Lunn, A., (ed) "The Englishman in the Alps", 2nd. ed. Oxford University Press, 1927
9. Morgan, D.F. "Hiking for All" C.A. Pearson, 1931
10. Ratti, A.A., "Climbs on Alpine Peaks" Houghton Mifflin, 1923
11. Ross, F.E. Baker, E.A. (ed) "The Voice of the Mountains" George Routledge, 1913
12. Smith, W., "Pioneers of Mountaineering" Blackie,
13. Stanley, B., "The Hikers Companion" Universal Press, 1932
14. Tompson, H.S., "Alpine Plants of Europe" George Routledge, 1911
15. Tyndall, J., "The Glaciers of the Alps and Mountaineering", J.M. Dent, 1861
16. Weston, W., "The Playground of the Far East" John Murray, 1918
17. Wright, W.P., "Alpine Flowers and Rock Gardens" George Allen & Unwin, 1924
18. Young, G.W., "On High Hills", 2nd. ed. Methuen Co., 1927

町田立穂氏寄贈図書目録（和書の部）

目録は内容別に大分類し、書名、著者名、発行所および発行年月の順によった。

1. 紀行・随想

1 山水美論　久保天随　新声社　明33・5
2 木蘭舟　小島烏水　新声社　明33・7
3 旅行談　小島烏水　内外出版協会　明35・7
4 木蘭舟　小島烏水　文泉堂　明39・4
5 山水無尽蔵　小島烏水　隆文館　明39・7
6 雲表　小島烏水　佐久良書房　明40・7
7 富士山大観　小島烏水補修　如山堂書店　明40・8
8 不二一周　平山勝熊編　隆文館　明40・8
9 金剛杖　登張信一郎　春陽堂　明40・9
10 山水美論　小島烏水　如山堂書店　明41・9
11 水彩写生旅行　大下藤次郎　嵩山房　大2・4
12 霧の王国へ　別所梅之助　警醒社書店　大5・10
13 金剛山　菊地清　洛陽堂　大7・7
14 富士行　大町芳衛　春陽堂　大8・7
15 関東の山水　大町桂月　博文館　大9・7
16 千山万岳　志村烏嶺　嵩山房　大11・6
17 日本アルプス縦断記　河東碧梧桐他　大鎧閣　大11・7
18 槍ケ岳を中心として　福沢桃介　ダイヤモンド社　大13・7
19 日本アルプス縦走記　窪田空穂　摩雲巓書房　大13・8
20 登山の話　田村剛　文化生活研究会　大15・6
21 山行記　附図秩父山系図　田島勝太郎　昭文堂　大15・7
22 処女地征服大利根水源紀行　利根水源探検隊　煥乎堂　昭2・8
23 使命を負うて　吉野玉雄　昭2・10
24 北海道のスキーと山岳　加納一郎　北海道山岳会　昭2・11
25 山と女　斎藤美子　柳畑社　昭3・6
26 山の呼ぶ声　藤木九三　文明書院　昭3・6
27 黒部谿谷　冠松次郎　アルス　昭3・7
28 屋上登攀者　藤木九三　黒百合社　昭4・6
29 劔岳　冠松次郎　第一書房　昭4・6
30 大菩薩連嶺　松井幹雄　光大社　昭4・9
31 山岳征服　三木高嶺　黒百合社　昭4・10
32 山家日記　吉田絃二郎　早稲田大出版部　昭4・12
33 登行記　吉沢一郎　古今書院　昭5・3
34 山と雪の日記　板倉勝宣　梓書房　昭5・3
35 雪・岩・アルプス　藤木九三　梓書房　昭5・5
36 双六谷　冠松次郎　第一書房　昭5・6
37 山に憩ふ—紀行と随想　河田楨　山と溪谷社　昭6・4
38 ・山・都会・スキー　石川欣一　四六書院　昭6・5
39 黒部　冠松次郎　第一書房　昭6・5
40 後立山連峰　冠松次郎　第一書房　昭6・6
41 槍・穂高・岩登り　藤木九三　木星社書院　昭6・7
42 上越国境　角田吉夫　大村書院　昭6・8
43 武蔵アルプス　松尾秀一　隣人之友社　昭6・10
44 氷河と万年雪の山（特装版）　小島烏水　梓書房　昭7・6
45 アルプス伝説集　山上雷鳥　黒百合社　昭7・6
46 チロル伝説集　山上雷鳥　黒百合社　昭7・10
47 赤石溪谷　平賀文男　隆章閣　昭8・6
48 破片岩　冠松次郎　耕進社　昭8・6
49 奥秩父　原全教　朋文堂　昭8・7
50 雪線散歩　藤木九三　三省堂　昭8・7

●お知らせ――――――図書委員会

第12回図書交換会をおこないます。多くの会員のご協力を期待しています

日時 10月27日（土曜日）午後2時

場所 日本山岳会ルーム

山の本・雑誌をご出品頂ける方は、10月10日までに「出品書籍名・希望価格・会員番号・住所・氏名」をそえて図書委員会までご連絡下さい。

昭和五十四年九月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 西堀栄三郎
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三―四八二九番
印刷所 東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂